

闇市場の存在を考慮した余剰分析による上限価格規制政策の評価

成蹊大学大学院経済経営研究科博士後期課程

内田 潤

上限価格規制は、法令などによって上限価格を定め、それより高い価格での取引を規制するものである。上限価格規制が正当化される根拠の 1 つには、これにより消費者の経済的負担を軽減できることが挙げられる。しかし、上限価格規制が実施されて、市場で超過需要が発生するとき、上限価格規制による低価格の恩恵を受けられる需要者は一部である。また、上限価格規制によって生じうる、上限価格より高い価格で取引される市場（闇市場）の存在は、消費者の経済的状況を悪化させるかもしれない。

このような意味で、闇市場の存在を考慮したモデルによって上限価格規制政策を客観的に評価することは重要である。本研究では、余剰分析の手法を用いてこれを可能にした。この際、市場供給者の闇市場における行動パターンと上限価格で取引される市場における供給の割り当てパターンに着目して分析を行った。

本研究では、「行動パターンによって特徴づけられた市場供給者がどれほど存在するか」や「上限価格で取引される市場でどのように供給が割り当てられるか」について条件が与えられれば、余剰最大化の観点などから上限価格規制の是非が評価できることを示した。結果として、上限価格で取引される市場での供給が非効率的であるときには、上限価格規制は概ね支持されないことが示された。